



ムラの知恵を
掘り起し、
未来の世界へ
つなげよう

認定 NPO 法人 ムラのミライ 2014 年度 (H26 年度) 年次報告書

第 22 期 2014 年 4 月 1 日から 2015 年 3 月 31 日 (創立 1993 年 4 月 1 日)



ANNUAL REPORT 2014

目次

- 03 ムラのミライとは
- 04 巻頭特集：これからのムラのミライへ
 - 「ソムニードからムラのミライへ 次世代へ引き継ぐ志」
 - 「課題を持つ人々の出会いの場を」
 - 空町倶楽部からまちスポへの道のり—

- 08 Project Story & Data インド まもる・つくる・ひろげる 地域づくりを支える若い指導者たち
 - 農業で暮らしを営み続ける村人たちによる「循環する」村づくり
- 11 Project Data セネガル インドからアフリカへ「村人が主役」の地域づくり手法を技術移転
- 12 Project Story & Data ネパール 「泳げる川」を取り戻したい！
 - 学校で、地域で、ネパールの人々の手でバグマティ川をよみがえらせる！
- 15 Project Data 飛騨高山 市民の活動をサポートするまちづくりスポット 新しい地域づくり、まちづくりを目指して
- 16 財務状況
- 18 ムラのミライ スタッフ インド・ネパール・高山・関西
- 20 ファシリテーターの育成・派遣
- 24 「ネパール地震緊急救援」のご報告
- 25 2014年度 ムラのミライを支えてくださったみなさま
- 26 2014年度トピックス



ムラのミライとは

日本と海外の両方で地域づくり・人づくりに取り組む NPO です。1993年に設立し、飛騨高山（岐阜県）、西宮（兵庫県）、ビジャカパトナム（インド アンドラプラデシュ州）、カトマンズ（ネパール）に事務所を置いています。

活動の目的

私たちは、コミュニティ・経済・環境のバランスが取れた社会の実現を目指します。そのために、各地域で、コミュニティが資源を維持、活用、循環させる仕組みや暮らし方を創り出していきます。また、その方法論を、生活の現場での活動を通して構築し、それを担い実現する人材の育成を行います。

活動の内容

地域づくりプロジェクトの実施（インド、ネパール、セネガル、日本）
コミュニティファシリテーターの育成・派遣

活動の方法

ムラのミライは、過去の経験から真摯に学び、徹底的に現場のリアリティーに向き合う試行錯誤と実践を繰り返す中で、独自の方法論「対話型ファシリテーション／メタファシリテーション」を築きあげました。その手法をプロジェクトで実践するほか、国内外での研修・セミナーや書籍で広く共有しています。

受賞歴

2008年 岐阜県（国際部門）功労者知事表彰
2009年 第49回「消費者のためになった広告コンクール」金賞
2010年 第22回毎日国際交流賞
2011年 第7回 JICA 理事長表彰
2011年 高山市制75周年記念国際交流功労表彰
2013年 第10回パートナーシップ大賞優秀賞
2014年 第16回日本水大賞国際貢献賞



ロゴについて
「の」の中の卵型と▶の矢印で、団体が各地の現場で人と関わる際に大事にしている「コトドリと顔のたとえ話「儲けて待つ」」を表現しています。
▶の矢印は、前に進むという意味と、勇をつついてうながす鳥のクチバシでもあります。

認定NPO法人 ムラのミライ

〒506-0031 岐阜県高山市西一色町3丁目820-1 TEL (0577) 33-4097 (代) FAX (0577) 36-5471 E-mail: info@muranomirai.org
関西事務所：〒662-0856 兵庫県西宮市城ヶ瀬町2-22 早川総合ビル3F TEL / FAX (0798) 31-7940 URL: http://muranomirai.org



ソムニードからムラのミライへ 次世代へ引き継ぐ志



“私が何にもまして幸運だったのは、ムラのミライを、自分たちの活動の場として未来を切り拓こうという若い人たちが現れ、私に、もうムラのミライは任せてくださいと言ってくれたことです”

和田 信明 海外事業統括 / 前代表理事

私が年次報告書の巻頭言を書くのは、これが最後です。私はこの5月の総会をもって、代表、及び理事を辞任しました。途端に、このようなところに何を書いてよいやら、分からなくなりました。ですから、今回は、お許しをいただいて気の向くままに書いてみたいと思います。

まず、私が書かなければいけないのは、お礼です。ムラのミライの1993年のささやかな出発のとき以来、実に多くのみなさんに、支えて頂きました。とりわけ、浅野宜之さん、稲部香代子さん、岩崎正さん、近藤真由美さん、栗田美由紀さん、竹内ゆみ子さん、直井晃一さん、長畑誠さん、山田貴敏さん、和仁一博さんには、理事、職員として、文字通り公私ともに筆舌に尽くしがたい支えをいただきました。すでに、中には幽明境を異にした方もお二方おられます。私の感謝の気持ち、彼岸にも届くことを祈ります。思えば、私の未熟さのために、皆さんには、多大なご苦労をかけました。この歳になっても、まだ己の未熟さを云々するとは、梅檀は二葉より芳し、の方ではなく、三つ子の魂何とやら、の方ですか。これはもう、一生治らないものと覚悟するしかなさそうです。ともあれ、これからは、少なくとも団体の経営でみなさんにご迷惑をおかけすることはないので、ご安心ください。

正直言って、これまでのムラのミライは、と言うより、旧ソムニードは、「和田信明のソムニード」というイメージが強かったと思います。決して私の本意ではなかったのですが、創業の社長がいつまでも居座っていた感否めません。望まれてそうなった、と言えば聞こえはいいのですが、私の志を継いで、ムラのミライを担っていかうという次世代のみなさんが現れるまで、これだけの時を要したというところでしょう。そもそも、1993年になぜNGOを立ち上げたか、ということは、これまで何度もいろいろな機会に書いてきたので、ここでは敢えて触れません。ただ、開業という言葉がピッタリな始め方をして、おこがましくも、これこそ私の天職ではないか、という意識が始めるまで活動を続け、そして、自分なりの方法論を深めていきたいという気持ちがあった、此処まで来てしまった。ざっと言えば、こんなところですよ。「自分なりの方法論」というのも、これまたおこがましい言い方です。なぜなら、私のフィールドでのパフォーマンスを、方法論まで高め、体系化したのは、中田豊一さんだからです。私たちには、四半世紀を超す不思議な「腐れ縁」があって、物好きにも、私をネタに方法論を編み上げるという彼の営為がなければ、少なくとも、この10年近くは、フィールドで何をやるかという次元で、私は活動を続けることはできませんでした。

しかし、私が何にもまして幸運だったのは、ムラのミライを、自分たちの活動の場として未来を切り拓こうという若い人たちが現れ、私に、もうムラのミライは任せてくださいと言ってくれたことです。私としては、ムラのミライが、それだけの魅力を持ったNGOになった、という風に自惚れたい、で

はなく、思いたい。

とにかく、ムラのミライという器をどのような器にしたいか、そしてその器を使ってどのような社会を築きたいかということについては、折に触れてメッセージを出してきました。その集大成とも言うべきものが、「ムラのミライがめざすこと」(<http://muranomirai.org/namechange>)というタイトルで、ムラのミライのウェブサイトに掲載されていますので、まだお読みでない方は、是非ご一読ください。これまでの活動を通じて、私たちがどのような認識を持つに至ったか、そして、これからどうしたいのかが、余すところなく書かれています。

さて、これから私は、まだ、ムラのミライの片隅をお借りして、現場に通い続けるつもりです。現場の技術を、おこがましい言い方ですが、さらなる高みに持ち上げたいと思っています。そして、それを研修という形で皆さんにも折々お伝えしたいと思っています。また、当面、中田豊一さんとの新しい共著に集中したい（願望ですが）と思っています。前著では書けなかったこと、そもそも村とは何か、それは私たち人類にとってどういう意味を持ち、どういう展望があり得るのか、それをじっくり書いてみようと思っています。

ところで、最後になりましたが、人生何が起るか分からない、ということ、身をもって学んだのが、被災者と支援者を両方経験させてもらった今回のネパールの大地震です。現在、非常時なりになんとなく落ち着きを取り戻したネパールですが、少なくとももとの生活に戻るためには、まだまだ皆さんのご支援が必要です。当面、もうすぐやってくるモンスーンの雨風をどうやってしのぐか、引き続き復興支援を続けたいと思います。

もう、この辺りにしておきましょう。思えば、ここで直接お名前に触れなかった方たちも含め、これまで様々な方法で支えてくださった皆さん、本当に、ありがとうございました。そして、これからもムラのミライを、よろしく願います。



左：和田、右：中田代表理事

課題を持つ人々の 出会いの場を

—空町倶楽部から

まちスポへの道のり—



国内事業統括 / 前専務理事 竹内 ゆみ子

地域には何かをしたいと思いつきながら活動している人がいる。

その人たちの背中を押して応援してあげれば、もう一歩も二歩も歩みを進められる。

がむしやらに地域と向き合おうとしていた日々、
そして。

交流の場づくりを模索

2014年7月のある日、交流スペース「まちスポ飛騨高山（以後まちスポ）」で「みちのく結心会」の呼びかけにより「福島市渡利への野菜支援」第二弾が開催されました。高山で野菜を集めて福島へ送るといった活動です。

福島出身の女性が自宅を集めていたのですが、まちスポを利用するようになって、大幅に野菜の届く量が増えたそうです。場所がはっきりしていることと、NPO法人の運営する場所利用で信頼がぐんと上がったのでしょう。また、モノ作りをしている母親たちで開催した「ママフェス」も、屋内外を目いっぱい使って盛大に開催され、その後、参加していた女性が、新たに活動の場として、まちスポを利用することにつながりました。ちょっと変わったところでは、小さなビジネス、フラワーアレンジメント教室の新しい参加者を募集するためにまちスポを利用して生徒の拡大につなげた方もいました。

そして今年の5月の連休には子ども向けのお絵かきイベントを実施しました。子どもたちは、建物の広いガラス面と屋外のコンクリートを使って、思う存分チョークの落書きを楽しみました。これがきっかけで、夕方近所の親子連れがずいぶん屋外スペースを訪れるようになりました。このように建物の全部を使って、自分たちの思いや活動を発信できる場として「まちスポ」は利用されています。

振り返ると2000年、当時ソムニードという名前だったムラのミライは、交流の場づくりを模索して高山の東側にある空町地区の空き家活用に関わりを持ちました。自分たちが自由に集まれる場が欲しいと5つのNPOが協働で運営をし、地域の人にも利用できる交流センターを目指していたのです。この頃市街地に空き家が増え

てきていた時期でもありました。

インドの村で村長さんからの「子どもたちが町に出て行ったきり村に帰ってこない、どうしたらいいだろう」という問いに答えられなかった私は、がむしやらにムラのミライがある高山の地域に向き合おうとしていたように思います。

空町地区は、昔から人の出入りが少ない地域で、したがって当然高齢化率が高くなっていました。お年寄りから学ぶことが多く、地域に受け入れてもらうためには、地域の共有インフラに対して共に関心を持つことが大事だということも知りました。いわゆる近所付き合いについては、かなりいろいろ学ぶところが多く、向こう三軒両隣の付き合いもここで学びました。

しかしNPOという言葉がまだ浸透していない時期で「あんたらいいことやってるけど、それは議員さんが市長さんがやることだから。なんならこの地域選出の議員さん紹介してやるよ」と言われたりもしました。

5つの団体が共同で運営するということと、空き家を住宅や店舗ではなく、全く別の機能として利用するという試みは、他の地方ではともかく高山を始め飛騨地方ではなかったため、かなり色々な方面から注目を浴びました。社会へ与えたインパクトという意味では、その後の高山市内で空き家活用の事例、例えば「かんかこかん」や社会福祉協議会の「よって館」などの交流スペースが出てきたので無駄ではなかったように思います。しかし空町倶楽部は、運営資金不足と耐震構造の脆弱な建物のため2008年に閉鎖することになりました。

このような活動を展開している頃、いろいろな方から市民活動の相談を受けるようになってきました。そんな相談の一つが、中国人花嫁の生活支援でした。地元の男性と結婚をした中国人の女性が、飛騨の生活習慣になじまず日本語もできず困っているという地域

の課題。ある女性が相談相手になるうちに、気が付いたら30人の相手をしていて、これ以上個人では対応ができないと私たちのところに相談に来たのです。

そこでムラのミライは、日本語コミュニケーション講座を開催しました。まずは孤立している花嫁同士の出会いを作ることから始めたのです。彼女たちは、初めての参加で、こんなにも多くの中国人が高山にいることを知り驚いていましたが、何ヶ月ぶりかの中国語で本当に嬉しそうにおしゃべりをしていました。講座には半々で中国人と日本人を配し、参加するだけで知り合いができました。1年を過ぎた頃から、市役所への苦情相談の電話件数はずっと少なくなってきたと聞きました。

私たちが終始目指したことは、
多くの出会いを作ることでした。

中国人、日本人問わず意識的に人と人を結びつける、そして、地元の行事等に参加することで地域とのつながりが自然とできるのです。もともと生活力は旺盛な彼女たちなので、機会さえあれば動き出すことができました。

意欲ある人々との出会い

高山市の東側約40～50キロに、上宝町というまちがあります。ここに地域の食材を利用したアレルギー対応の米粉パン開発に意欲を持つ母親がいました。自分の子どもが食物アレルギーであったため、周りの子供と同じようにパンを食べさせたいとの思いから、アレルギー反応のない地元の米を使って食パン作りに挑戦していたのです。高山に何年も住んであちらこちらを飛び回っていると、時にこのような意欲ある人々との出会いがあります。彼女は仲間と一緒にムラのミライの応援でパン工房を整え1年間にわたって米粉によるパンの試食品を作り、ついに小麦粉のパンに近い食感の米粉パンを作り上げました。

人と人をつなげていく

地域には、何かをしたいと思いつきながら活動している人がいます。その人たちの背中を押して応援してあげれば、もう一歩も二歩も歩みを進められるかもしれない。そういう人々を、別の世界にいる人とつなげることが出来れば、さらに発展していくのではないだろうか。地域が元気になるためには、そのような人々の間に立ち応援できる組織が必要だと思いつけていました。

そのような中2012年、大和リース（株）との出会いがありました。商業施設の中に市民の活動の場を作りたいので協働してほしいということでした。私はこれまでの経験から、いくら立派な場所を作ってもそれを運営する人が大事だということを強調しました。何度かの話し合いの末、ムラのミライと共に、中間支援をするNPOの立ち上げをすることになりました。

まちスポ設立事業をムラのミライが引き受けて、2015年6月でちょうど3年目を迎えます。それに先立ち、年度始めのこの4月、NPO法人まちづくりスポットは、ムラのミライ事業の枠組みから卒業し、自立した歩み始めることとなりました。現在高山のまちづくりスポットのスタッフは、パートスタッフも含めて5人。平均年齢は28.8歳。若者がいないと言われる農山村地域で、若者が中心に新しい動きをつくりだしています。





Project Story INDIA



しっかり者の
女性指導員パドマ

まもる・つくる・ひろげる 地域づくりを支える 若い指導員たち

オラたち村の百姓、そして指導員

2007年より、ムラのミライと共に活動を続ける村人たちの中から「指導員」たちは誕生しました。ムラのミライからの指導員研修を受け、周辺の村へ流域管理技術の研修を行い、振り返り、また次の研修に活かすというサイクルを通して、日々、指導員としての技術を向上させています。彼・彼女たちは、「村で唯一高等教育を受けた」とか「村一番の有力者」とか、そういった特別な人たちではありません。中学校まで卒業した指導員もいれば、小学校を中退した指導員も、読み書きの出来ない指導員もいます。

ムラのミライから流域管理技術を学び、実践していったなかで、流域とは個人で管理できるものではなく、村で、そして流域を共有する地域全体で管理していくことの必要性に気づき、「周りの村でも、オラたちの活動を広めよう」と立ち上がった普通の村人たちが「指導員」たちです。なので「指導員」は、村での肩書でもなければ、仕事でもありません。彼・彼女らは他の村人と同じように農業を生業としています。



ブータラグラ村



若き指導員シムハチャラム



ブータラグラ村の指導員

どんなときにも堂々と振る舞うモハンは、村のリーダー的存在。指導員として近隣の村で研修をするときも、参加者としてムラのミライの研修を受けるときも、誰かが話していればそっと見守り、静かであれば、すかさず声をあげてその場を盛り上げます。誰よりも村のことを、そして村人たちのことを思うモハンだからこそ、「(水不足や高利貸しからの借金に苦しむ)オラたちの村を変えたい」と、ムラのミライが他の村で行っていた流域管理の研修に、事業が始まった当初から数か月間、一人で参加し続けました。それが後々、ムラのミライとブータラグラ村が活動を共にするきっかけとなり、活動開始から研修と実践を続けてきたブータラグラ村は、いまでは流域保全活動でも農業改善活動でも、他の村にとってお手本の村になりました。

他の指導員たちの活躍も、モハンに負けてはいません。エースと呼ばれるにふさわしい、センス抜群のアナンドは、研修に参加する村人の理解度を把握しながら、質問の仕方を変えたり、進行速度を変えたり、機転を利かしながら研修を行います。責任感の強いラッジャイヤ、いつも元気なドルガラオ、タフで粘り強いラメッシュ、そして、少し恥ずかしがり屋の最年少のシムハチャラムは、地元の小学校の先生になるという夢を追いかけつつ、農家として、指導員としての活動も続ける道を模索しています。



ブータラグラ村の指導員6人はみな20代の青年ですが、そのうちの5人が父親でもあります(立っている男性左からモハン、ラッジャイヤ)

ボガダヴァリ村の指導員

ボガダヴァリ村には年齢も性別も異なる4人の指導員がいます。かつては、みな、都市への出稼ぎと日雇い労働に頼らざるを得ませんでした。2007年から行っている流域保全活動の成果が出て、生業である農業で生計を立てられるようになりました。そして、いまでは、農業に精を出す傍ら、指導員として周辺の村で流域管理の研修を行っています。

唯一の女性指導員でしっかり者のパドマは、研修に参加する村人たちのことも、一緒に研修を行う指導員たちのことも、誰よりもよく見えています。「チャンドラヤ、この部分言い忘れてるよ。」と他の指導員をフォローしたり、研修が終われば「次は女性参加者がもっと発言できるように進めたい。」と反省したり、一番真剣に取り組み、一番研修するのを楽しんでいる彼女は、ボガダヴァリ村の村人からも周辺の村人からも頼られる存在です。

オッチャン指導員のダンダシは、その貫録で研修に良い緊張感をもたらしてくれます。「あれが欲しい」「これが欲しい」と外部

の人に頼ってばかりだった隣の村での研修では、「まずはためえの頭で考えろ!」と喝を入れたり、時には、「チャンドラヤ、そこちよつと違うじゃろ」と冷静にツッコミを入れたり、頼れるオッチャン指導員です。

研修で学んだことをいち早く取り入れたり、他の村人に活動への参加を促したりと、いつも積極的なチャンドラヤは、周辺の村人やムラのミライとのコミュニケーションの中心的存在です。

3人に遅れて指導員になったパーライヤも、3人の研修をサポートし、時には自分が先頭に立って研修を行いながら、指導員としての技術を磨いています。



黒板左女性:パドマ
黒板右男性:ダンダシ

オラが、アタシが、続ける地域づくり

ブータラグラ村でも、ボガダヴァリ村でも、それぞれの指導員がそれぞれの色を出しながら、互いに助け合い、切磋琢磨し、流域管理の技術を村から村へと伝えています。

ある日、ブータラグラ村のモハンが、「これからオラたちの村をどうやってつくっていくか、(指導員の)6人でよく話し合っているんだ。」と言っているのを耳にしました。後日、ブータラグラ村の指導員たちは、【(流域管理技術に引き続き)有機農業を隣の村に広めていく】という彼らの目標を話してくれました。

自分たちの村で有機農業を普及していくためには、土や森や水を共有する同じ流域内の村にも有機農業の技術を普及する必要があると、彼らは考えたからです。そして、この目標は、流域内の資源の循環の仕組みを理解し、それを他村に伝えている指導員たちだからこそ、考えつくことができた目標です。ムラのミライとのプロジェクトは2015年8月で終了しますが、その後も、彼らが中心となって、村づくりを進めていく様子が垣間見えました。

土をつくり、森をつくり、水をつくり、それらを農業に活かす。そして、村の指導員たちが、その活動を周辺の村にも広めていく。南インドの小さな農村の、普通の村人たちの中から生まれた流域管理の指導員たちは、気付けばそれぞれが村のリーダーとなり、村を引っ張る存在となりました。ムラのミライとの8年に及ぶ流域管理プロジェクトで誕生した指導員兼リーダーたちの、地域づくりの活動はまだまだ始まったばかりです。



Project Data



INDIA

農業で暮らしを営み続ける 村人たちによる 「循環する」村づくり



どこで

■インド アーンドラ・プラデシュ州
スリカクラム県



だれが/だれと

9か村の村人たち

なぜ

木々が減り土壌が流れ出し、荒廃して
いく森林。現金収入のために都市
へ出稼ぎに行く村人たち。

「出稼ぎに行くことなく、孫子の代ま
でもここで暮らしていけるように」と
いう村人たちの強い思いと共に、ムラ
のミライは2007年から「流域」とい
う単位で、村と周辺の山々、農地を総
合的に捉え、自然資源を利用し管理
していくための考え方やスキルについて、
村人たちに研修を行ってきています。

2014 ハイライト

農業改善に取り組む村では、ミミズを
使ったたい肥を年間 800 キロ以上
自分の村で踏えるようになりました。
新しく農業改善に取り組んだ村でも、
農業の使用をやめ、栽培計画や保水
土対策を行うことで、コスト削減や、
長期間に渡って多種類の作物を収穫
することに成功しました。

また、近隣 6 か村でも流域管理委員
会が設立されました。1 か村で先駆
的に行う総合計画づくりでは、村の
将来ビジョンをかけた「自然資源
管理」「有機農業の普及」「内部資金
運用」を3本の柱として、2020年
までの活動計画が策定されました。



キッチンガーデンでの効果的な野菜栽培



ミミズを使っ
たい肥づくりの
デモンストレーション



流域管理委員会を中心に
村人が設立した種子銀行
(シード・バンク)の外観

種子銀行の内部▶



キッチンガーデンモデル農地



稲を脱穀している村人



Project Data



SENEGAL

どこで

■セネガル共和国
ティエス州グニエヌ県
バガナ村及びその周辺



だれが/だれと

上記の農村に暮らす人々

なぜ

若者たちが、都会や海外に出稼ぎに
出なくても、豊かに暮らして行ける
ような農村社会を実現したい
というのが、パートナーとなる
NGO「Intermondes」スタッフの
切実な願いです。

そこで、地域の農民たちの農業技術
および営農の能力を強化することで、
乾燥の進む農村地帯において、
水資源や土地といった資源を、持続
的かつ効率的に管理・運営する
農村開発プロジェクトを新たにスタ
ートします。

2014 ハイライト

インドで取り組んできた農村開発
プロジェクトで培った知識・技能を
セネガルで応用するため、
Intermondes 主要スタッフ 2 名を
インドのプロジェクト地 (10 ページ
参照)に招聘し、1ヶ月間の研修を
実施しました。

2名は、農村における自然資源の管
理・活用の実践方法および村人主
体の活動を促すファシリテーション
技術について学び、理解しました。

これから

引き続き、流域管理委員会を中心に、
各流域での保水土対策を行って
いきます。同時に、これまでに農業
改善を実践してきたモデル農家た
ちが指導員となり、周辺の村にも農
業改善のコンセプトを普及してい
きます。

インドからアフリカへ 「村人が主役」の 地域づくり手法を技術移転

インドで研修



Intermondesとインドのスタッフの集合写真
(インド、バタバトナム研修センター)



資源循環型の村に向けての総合計画づくりを視察
(インド、アーンドラ・プラデシュ州スリカクラム県)



流域管理事業に参加している村で研修を受ける
Intermondesスタッフ(インド、アーンドラ・
プラデシュ州スリカクラム県)



村を訪れて流域のコンセプトを学ぶIntermondes
のメラニー氏(左から2人目)とママドゥ氏(左から3
人目)(インド、アーンドラ・プラデシュ州スリカ
ラム県)



農業改善の活動を視察(写真はミミズを使っ
たい肥)(インド、アーンドラ・プラデシュ州スリカ
ラム県)

これから

セネガルでの活動を本格的に開始
するための準備として、研修の成果
を Intermondes 内で共有・普及
をします。また、助成金申請などで、
プロジェクト始動の資金集めを実施
します。

五感を使ってバグマティさんを知ってみよう。
耳を澄ませて、周りを見渡して、匂って、触ってみる…
(環境副読本 Bagmati Ji: We Learn and Act With the Bagmati River より)

「泳げる川」を取り戻したい!

～学校から地域へと、ネパールの人々の取り組みが広がってきています～

分散型排水処理施設を建設しました

■多くの地域で下水施設が整備されていないカトマンズでは、各家庭からの排水が未処理のままバグマティ川へ垂れ流しとなっています。こうした汚染を食い止めるために、川の中上流地域のゴカルナ地区デシェ村にて、分散型排水処理施設 (DEWATS)

を建設しました。この施設の特徴は、比較的安価で複雑な技術を必要とせず、地域の人々の手で維持・管理が可能なこと。川の浄化はもちろん、住民が生活環境を自分たち自身で改善するために、2014年2月より事業を開始しました。



ほぼすべての行程に村の人々が関わりました

■2014年度は、デシェ村全177世帯からバグマティ川に流れ込む排水を浄化できる分散型排水処理施設を建設しました。施設を活用するのはデシェ村の人々です。建設にあたっては、コストを含めた建設の工程表を村の人々と共有し、ほぼすべての行程に村の人々が関わりました。また、川が汚れる原因を知るなど、村の人が自分たちで生活環境を改善するための手助

けとなる研修を実施しました。2015年1月には排水処理施設が完成し、施設を維持・管理するための互助組合が発足しました。2月28日の竣工式に登壇した組合長が「村で定期的に清掃活動をおこなうこと」を宣言しました。村の住環境保全に向けた取り組みが始まるとうとしています。

完成した分散型排水処理施設 ▶



まずは川の健康状態を知ることから

「土が病気になった場合、それを知らせてくれるものがあります。わかりますか？」
「土の臭いとか…」
「皆さんが体調不良になって病院にいった時、何を検査しますか？ 医者にはあなたの血液や尿、つまり体を流れる水の状態をチェックしているんです…」
ムラのミライスタッフとデシェ村の人々の間で、そんなやりとりが続きます。土や水、植物といった、村の人々にとって身近なものを切り口に、川が汚れているとはどういうことなのかを、ひとつひとつ丁寧に村の人たちと一緒に確認していきます。



川の汚染原因について等、参加者と対話しながら研修を進める

日本の地域の取り組みをネパールへ



地域発・環境保全の取り組みを学ぶ7日間

「日本から戻った後、自分の学校の敷地にあるゴミ山に今まで目が向いていなかったことに気がついたんです。」そう語るのは、ムラのミライの訪日プログラム (2014年10月13日～18日) に参加したゴビンダ先生。
訪日プログラムに参加したのはカトマンズから5人の環境教育担当の先生と地方公務員、そしてソムニード・ネパールのスタッフ2人を加えた計7人です。日本の地域での環境保全の取り組み事例を知り、ネパールでできる活動のヒントを得るためでした。愛知、岐阜のNPO、市民グループ、学校、民間企業に受け入れていただき、地域や学校でのゴミの分別・リサイクルの取り組み、川を通じた地域づくりなどを学びました。
訪日最終日には報告会を催し、参加者は「自分の身の回りからゴミの分別に取り組んでいきたい」「ここで見たこと、日本の皆さんの活動を周りの人たちに伝えたい」という決意を語りました。帰国した彼らは、体験したことを、周りの先生や学校の生徒たちと共有し、独自の活動を始めています。

「バグマティ川と学び、行動する」環境副読本が完成!

2014年度は、カトマンズ市内の学校に通う子どもたちが、バグマティ川について楽しく学びながら、自分ができていることを考える副読本づくりに取り組みました。
環境教育専門家のチャタジー・公子さんの協力を得て、先生たちとともに環境副読本「Bagmati Ji: We Learn and Act With the Bagmati River (バグマティさんーバグマティ川と一緒に学び行動する)」が完成、6,500部を印刷しました (英語・ネパール語)。できあがった副読本は、学校の先生たちを通じて、生徒とその保護者に配布する予定です。今後はカトマンズ市内での更なる普及を目指します。



地域の未来を背負う子どもたちに、川の課外授業を!

一みなさまからのご寄付で子どもたちの環境教育をサポート
川の上流から下流まで、自分の足で歩き、五感をフル活用して川を知るーネパールではこれまで行われてこなかった、参加型・体験型の授業に初めて参加した生徒たちは、川の下流がひどく汚れていることに驚きを隠せません。
カトマンズの学校の先生たちと作り上げたこの授業の実施を支えるために、ムラのミライ初のクラウドファンディング (インターネットによる資金集め) に挑戦しました。みなさまから638,000円のご寄付をいただき、バグマティ川の実情を知る課外授業の実践をサポートしました。



Project Data



NEPAL

学校で、地域で、 ネパールの人々の手で バグマティ川をよみがえらせる！

どこで

■ネパール連邦民主共和国
カトマンズ都北部 ジョルパティ地区・
ボーダナート地区・ゴカルナ地区



だれが/だれと

上記地区内の小中学校の生徒たち、
環境教育担当教員、生徒たちの保護
者を含む地域住民

なぜ

ネパールの首都カトマンズを流れる
バグマティ川は、近年の急激な人口
増加に伴い、大量のごみ投棄や排水
の垂れ流しにより極端に汚染されて
います。行政だけに頼っては解決
できない問題に目を向け、失われた
バグマティ川の再生のために、カト
マンズの住民たち自ら「何をすべきか」
を考え、地元の問題に取り組む
ためのサポートをしてきました。

2013 ハイライト

2014年10月に、教員や地方自治
体職員を含む7人が来日し、名古屋・
岐阜における地域での環境保全活
動を学びました。これまでに実施した
課外授業や、日本での経験を反映さ
せた環境副読本が作成され、今後の
授業で活用していく予定です。

また、地域住民が管理運営できる分
散型排水処理施設の建設が完了し、
住民による利用、維持・管理が始ま
っています。



長良川を視察する研修生たち 岐阜県



研修に参加するデジュ村の人たち
カトマンズ



ゴミの分別をするカトマンズ市内の学校の子どもたち
カトマンズ



これから

地域住民が一丸となって環境保全
活動をおこなう状態をめざし、
2015年度は次の活動に取り組み
ます。

(1) 学区横断的な環境保全活動
を実現するために、学校の先生による
地域住民を対象とした研修をおこな
います。また、研修をうけた住民によ
るアクションプランづくりをサポート
します。

(2) 新たに分散型排水処理施設を
建設します。地域住民に施設の仕組
みやコスト・材料を共有し、建設に
携ってもらいます。また、汚染のメ
カニズムや施設の保全方法等に関
する研修を行います。加えて、他地域
へ活動を広める指導員を養成します。



Project Data



TAKAYAMA

市民の活動をサポートするまちづくりスポット 新しい地域づくり、 まちづくりを目指して

どこで

■岐阜県高山市



だれが/だれと

まちスポが中間的な存在として市民
と企業、そして行政とのコーディネ
ートやサポートを行っています。事業を
することで信頼づくりの構築をしてき
ました。

なぜ

場所の利用促進はもとより、そのほ
かに中間的な活動をしていることが、
なかなか市民に分かりにくいことも
あり、具体的な市民や企業を巻き込
む活動を展開する必要がでてきた。
わかりやすい事業をすることで関
連する人々や企業、行政との連携を
強めてきました。

2014 ハイライト

都市部の学生と飛騨中小企業の
連携を実現。社長の右腕として長
期インターンシップ事業を地元の
企業との連携で実施しました。
また、子どもを対象とした職業体
験を2日間のイベントとして実施。
地元企業の協力を得て、1500人
の参加を得ました。全国5地域の
中間支援組織「まちスポ」のスタッ
フが高山に集まり、今後の中間支
援のあり方や活動を検討し交流し
ました。



子ども職業体験



都市部の学生と飛騨中小企業の連携

これから

2015年度からはムラのミライの
手を離れ、独立した団体として
活動していきます。これまで市民
活動団体や企業への認知度は高
まってきましたが、一般の方への
認知度が低いので、今後は地域の
まちづくり協議会との連携など、
新しい関係構築に努めます。

財務状況

■活動計算書

(2014年4月1日～2015年3月31日) (単位：円)

科目	金額
I 経常収益	
1. 受取会費	711,000
正会費	711,000
2. 受取寄付金	18,674,963
個人	5,021,181
企業・団体	13,653,782
3. 受取助成金等	14,929,991
受取民間補助金	1,500,000
受取国庫補助金	13,429,991
4. 事業収益	72,321,254
自主事業収益	14,154,041
JICA 受託事業収益	54,875,882
政府・自治体受託事業収益	3,291,331
企業等受託事業収益	0
5. その他収益	301,362
受取利息等	301,362
経常収益計	106,938,570
II 経常費用	
1. 事業費	
(1)人件費	31,851,764
給与手当	28,073,577
法定福利費	3,778,187
(2)その他の経費	60,368,803
事業費計	92,220,567
2. 管理費	
(1)人件費	11,730,362
給与手当	9,919,514
法定福利費	1,810,848
(2)その他の経費	3,367,421
管理費計	15,097,783
経常費用計	107,318,350
当期正味財産増減額	△379,780
前期繰越正味財産額	1,886,080
次期繰越正味財産額	1,506,300

■2014年度決算概要

<収入>

●会費、寄付：夏・冬の寄付キャンペーンでは、それぞれセネガル・インドでの活動内容をくわしくお伝えした結果、合計 183 万円と、前年度を上回るご支援をいただきました（前年度より約 57 万円増加）。また、初めてクラウドファンディング（インターネットによる資金調達）に挑戦し、ネパールでの活動に対して、幅広い方々から計 63 万円のご支援を集めることができました。

●受取助成金等：民間の助成金 2 件（計 100 万円）を得て、セネガルの活動パートナーをインドに招いての研修を実施することができました。また、外務省 NGO 連携無償資金協力（1,247 万円）を得て、ネパールで地域コミュニティによる分散型排水処理の活動を始めました。

●事業収益：対話型ファシリテーション講座や研修の参加費収入が前年度より約 160 万円増加。それと連動して、書籍販売による収入も前年度より約 68 万円増加しました。

■支出

●事業費：円安の進行により、海外での事業費が予算より増加しました（予算比 5%増）。一方で、講座・研修参加者数や書籍販売数が伸びたことで、事業損益は 142 万円の黒字となりました。

●管理費：消費税が今期より原則課税方式になり、簡易課税方式だった昨年度までより大幅に納税額が増加しました。

■2015年度に向けて

●団体の強みである対話型ファシリテーションを柱として、この方法論の普及・人材育成コンテンツを体系的な事業として確立します。

●ムラのミライだからこその活動の成果と特色を理解し、応援して下さるパートナーやサポーターを広げるため、じっくりと活動を伝える機会とコンテンツを作ります。（セミナー、書籍、オンライン記事）。

●クラウド化・自動化・マニュアル化によって、さらなる効率向上を実現すると共に、多様な働き方（在宅勤務、非常勤、契約）のスタッフがチームで活動を実施できる環境を作ります。また、優先度の低い業務や活動の見直しや適切なアウトソーシングによって「雑用」「雑務」をなくし、各自が楽しんで業務を改善していける役割分担をおこないます。

■貸借対照表

(2015年3月31日現在) (単位：円)

科目	金額	
I 資産の部		
1. 流動資産		
(1)現金	6,819,976	
(2)未収金	1,896,095	
(3)棚卸資産	1,139,515	
(4)前払費用	60,480	
(5)立替金	29,410	
(6)仮払金	220,927	
流動資産合計		10,166,403
2. 固定資産		
(1)有形固定資産		
什器備品	124,102	
有形固定資産計	124,102	
(2)その他の資産		
保証金	460,000	
その他の資産計	460,000	
固定資産合計		584,102
資産合計		10,750,505
II 負債の部		
1. 流動負債		
(1)未払金	4,762,632	
(2)前受金	48,000	
(3)未払消費税	3,943,000	
(4)未払法人税等	72,000	
(5)預り金	418,573	
流動負債合計		9,244,205
負債合計		9,244,205
III 正味財産の部		
前期繰越正味財産	1,886,080	
当期正味財産増減額	△379,780	
正味財産合計		1,506,300
負債及び正味財産合計		10,750,505

財務諸表の注記

- 重要な会計方針
財務諸表の作成は、NPO 法人会計基準（2010年7月20日・2011年11月20日一部改正 NPO 法人会計基準協議会）によっています。
 (1) 固定資産の減価償却の方法
有形固定資産は、法人税法の規定に基づいて定額法で償却をしています。
 (2) 棚卸資産の評価の方法
棚卸資産は、最終仕入原価法で評価をしています。
 (3) 消費税等の会計処理
消費税給等の会計処理は、税込経理法式によっています。
- 事業費の内訳

科目	①地域開発及び地域自治支援に係る事業	②人材育成及び研修等に係る事業	③調査・研究に係る事業	④国際理解の推進と啓蒙に係る事業	⑤地域活動支援に係る事業	⑥その他本法人の目的を達成するために必要な事業	合計
(1)人件費							
給与手当	15,646,379	3,207,922	227,659	745,066	8,246,551	0	28,073,577
法定福利費	2,595,614	532,724	37,782	124,680	487,387	0	3,778,187
(2)その他の経費	48,171,545	8,502,293	1,144,078	487,569	1,563,318	500,000	60,368,803
合計	66,413,538	12,242,939	1,409,519	1,357,315	10,297,256	500,000	92,220,567

3. 固定資産の増減内訳
固定資産の増減は以下の通りです。 (単位：円)

科目	期首取得価額	取得	減少	期末取得価額	減価償却累計額	期末帳簿価額
有形固定資産						
什器備品	889,225	0	0	889,225	△765,123	124,102
合計	889,225	0	0	889,225	△765,123	124,102



MURAnoMIRAI STAFF

■INDIA ■NEPAL

バタバトナム研修センター

左上から
前川 香子: 事務局次長/海外事業部チーフ
P. Rama Rao: 夜間警備員
M.Surya Narayana: プロジェクト・オフィサー補佐
實方 博章: 海外事業コーディネーター
L. Kamakshi: アシスタント
K. Chinnammalu: アシスタント
B. Thulasamma: アシスタント



SOMNEED India

ビシャカバトナム事務所

左から
Mandapati Rama Raju: 代表/プロジェクト・オフィサー
S.Surya Prakash Reddy: 会計・総務
P.Ratna: プロジェクト・オフィサー補佐
M.Rama: アシスタント
S.K.Basha: 運転手
S.Narayana: 運転手



ムラのミライ契約コンサルタント
Mudunuru Ramaraju
 流域管理事業には開始当時から従事、
 またコミュニティ・ファシリテーター
 研修の講師も担当している。



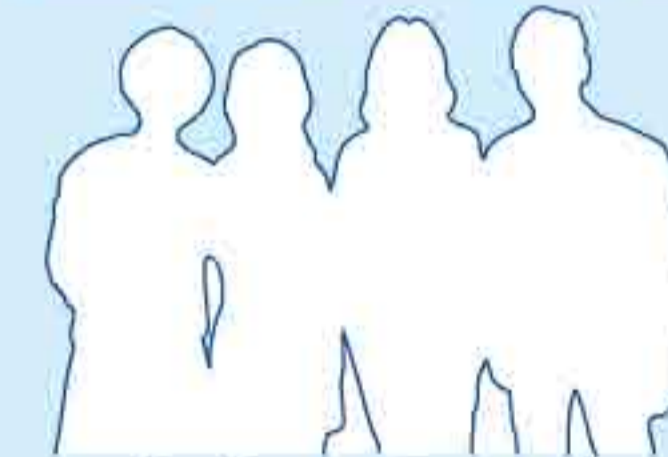
SOMNEED Nepal



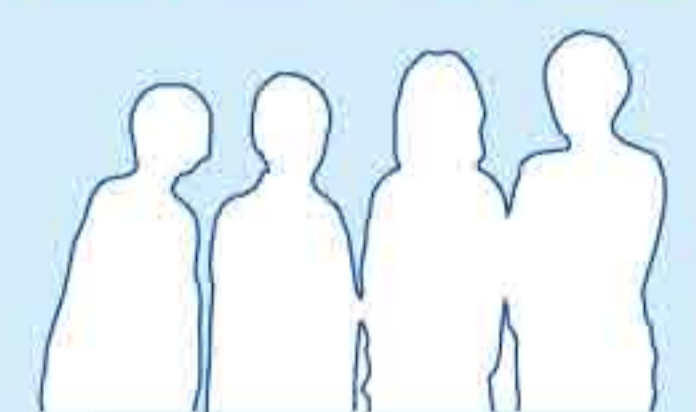
前列左から
和田 信明: 海外事業統括
Maneek Rai: 会計補佐
Thuli Lama: 総務補佐
Priti Rana: 会計・総務
池崎 翔子: 海外事業コーディネーター
 後列左から
Binod Chauhan: プロジェクトオフィサー補佐
Ujjwal Thapa: プロジェクトオフィサー補佐
Jeevan Paudel: ドライバー
Devendra Basnyat: プロジェクトオフィサー
Suman Basnyat: プロジェクトオフィサー補佐(写真なし)
Rangunath Dakhal: エンジニア(写真なし)

MURAnoMIRAI STAFF

■高山本部 ■関西事務所



宮下 和佳: 専務理事
 近藤 美沙子: コミュニケーション/海外事業調整
 田中 十紀恵: コミュニケーション
 中田 豊一: 代表理事



和田 あすか: コミュニケーション/ツール制作
 竹内 ゆみ子: 国内事業統括
 大塚 由美子: 常務理事/事務局長
 光本 昭子: 総務/会計

「村の人たちから受けた質問は、つまり『**あなたは何者ですか？**』という問いかけ。自分自身の答えを持てるように考えていきたい」(コミュニティファシリテーター研修参加者)



ムラのミライの人材育成

2014年度 より多くの方が対話型ファシリテーションに触れました

継続的に認知度が上がっています

対話型ファシリテーションのなりたち・理論・事例を紹介した書籍「途上国の人々との話し方」(2010年発行)は、1年間で約400冊を販売。ロングセラーになりつつあります。2015年2月には英語版「Reaching Out to Field Reality」を出版しました。「対話型ファシリテーション自主学習ブログ」では実践の役に立つ記事を毎週配信し、1年間で約8,600件のアクセスがありました。

多様な入り口を設けました

日本国内では、1回2時間で気軽に参加できる「対話型ファシリテーション入門セミナー」を新設し、13回開催。計188名が参加しました。本格的に学べる基礎講座は12回で計140名、フィールド研修は1回で3名の参加がありました。インドでは「地域づくり入門スタディツアー」に5名、「コミュニティファシリテーター研修」に5名(冬季3名、春季2名)が参加しました。

日本国内でも活用へ

JICAの技術協力プロジェクトへの専門家派遣1件、様々な研修・講演会への講師派遣8件、他NPO/NGOへのアドバイザー派遣2件を実施しました。特に、日本国内で活動する多様な機関からの研修講師依頼(テーマ=獣害対策・多文化共生・森林行政など)が増えています。



「研修中、過去の自分を思い出し『本当に自分は彼らの生活を直視できていたのか？プロジェクトを計画通り進めることに**労力を注いでいたのではないか？**』など、現場ではあえて直視しようとしなかった課題が次々とあぶりだされました」

(基礎講座参加者)

ムラのミライの人材育成

2015年度 目的・レベルに応じた育成コンテンツをさらに拡充します

世界に向けて発信します

「途上国の人々との話し方」英語版に引き続きベルシャ語・フランス語・インドネシア語版を出版し、日本以外での人材育成を広げていきます。それに伴い、英語版HPなど英語のオンラインコンテンツ作成に着手します。



実践レベルの人材を育てます

基礎講座に加えて、テーマ別研修・上級者向け研修・練習会を国内外で開催。認定制度を設け、対話型ファシリテーションを実践・普及できる人材を団体内外で育成します。一方で、さらに多くの方々に知って頂くため、入門セミナーの開催地も広がっていきます。



あなたの現場で

他組織のプロジェクトや研修プログラムへの人材派遣をより積極的に実施することで、ムラのミライの活動現場以外での対話型ファシリテーション活用を広げます。



ファシリテーター育成 カリキュラム

国際協力の活動報告には載らない
リアルな話を聞き出したい

地域の課題を
当事者主体で解決したい

海外でも国内でも通用する、
地域コミュニティづくりの
スキルを身につけたい

そんな方へ…

ファシリテーションの「実践力」を身につけよう！

STAGE1



メルマガ・HP、書籍

「活動や考え方を知る」

対象：お家や外出先で、気軽に学びたい人
いつでもどこでも、書籍やウェブ上の
コンテンツを読むことができます。

<書籍>

- ・途上国の人々との話し方
- ・Reaching Out to Field Reality
- ・南国港町おばちゃん信金

<ウェブ上コンテンツ>

- ・プロジェクト通信
- ・ムラのミライ・ウェブサイトやメールマガジンで

STAGE2

入門セミナー

「お試し体験をしてみる」

対象：忙しい方。まずは少し体験してみたい
という人

2時間のセミナーで、
対話型ファシリテーションの初歩を学びます。

STAGE3

基礎講座

「全体像をしっかり 理解する」

対象：本格的に使ってみたい人
丸1日かけて、対話型
ファシリテーションの基礎を
しっかり学びます。

STAGE4

基礎講座プラス

「練習しながら スキルアップ」

対象：職場や活動現場で実践を始めた人
講師とのやりとり、個別指導を通して、
場面・テーマに応じた使い方を身につけます。

- ・練習会
- ・ケーススタディ研修
- ・モニタリング研修
- ・アクションプラン研修

STAGE5

中級研修

「フィールドでの腕試し」

対象：現場での経験を積みたい人
ムラのミライの活動地域（海外・国内）で
3～7日間、体験しながら学ぶ
フィールドワーク型研修。

STAGE6

上級研修

「地域をデザインする」

対象：プロジェクト・マネージャーを
目指す人
対話型ファシリテーションを
編み出した、和田・中田両名が
講師のフィールドワーク型研修。
地域での活動を組み立てていく
スキルを身につけます。



アドバイザー・専門家・講師派遣

「現場ですぐに活用」

団体、企業、組織の方へ。

ムラのミライの理事・スタッフが、活動現場に赴き、
相談対応や職員向け研修を行います。

【人材派遣のお問い合わせ先】

consul@muranomirai.org（宮下）

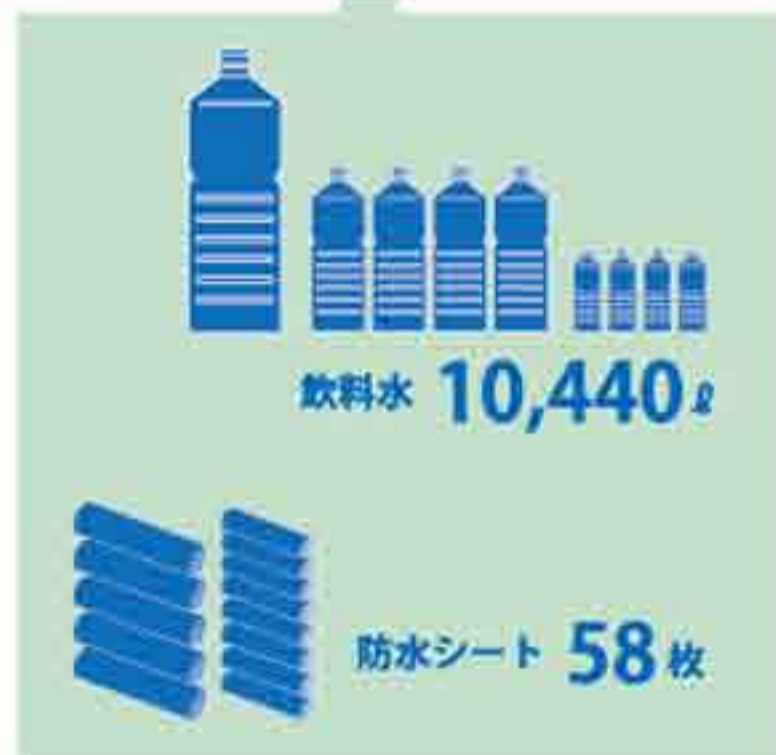
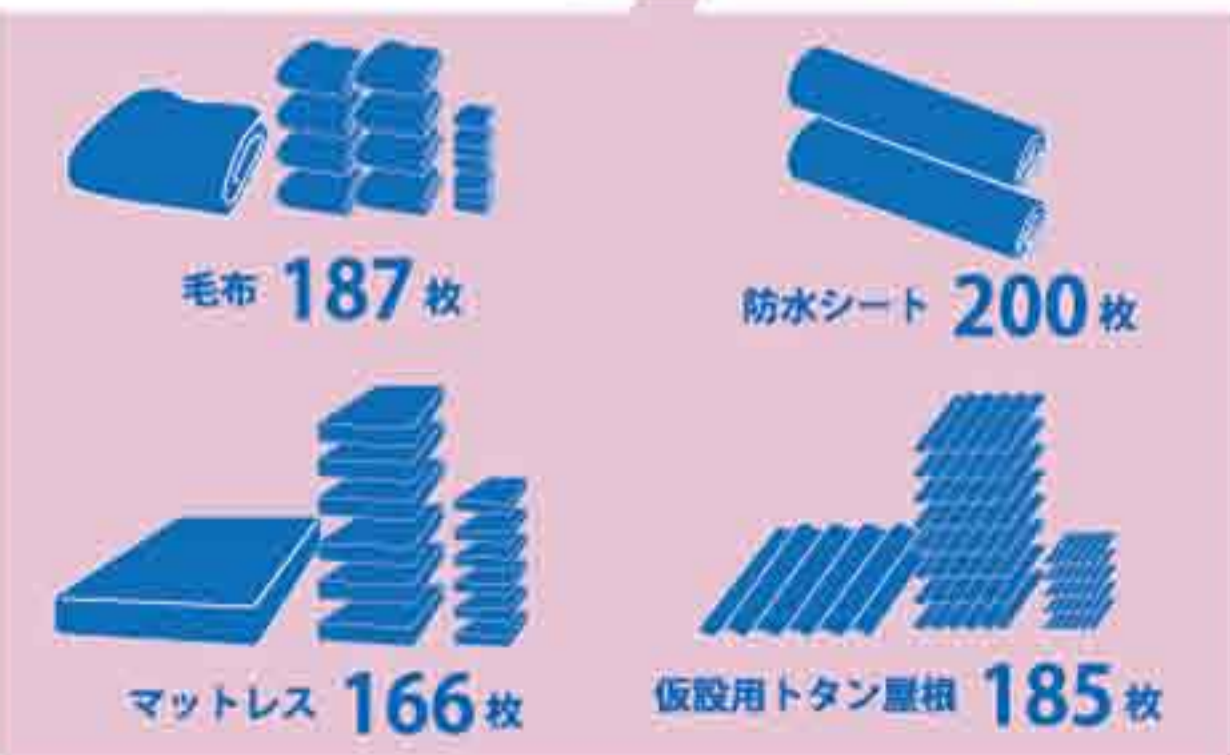
「ネパール地震緊急救援」のご報告

いま一番必要な物資を、被災者ひとりひとりの手に確実に

2015年6月19日までに総額**3,901,971**円のご寄附が寄せられました。ありがとうございます！

そのうち、6月1日までに1,541,181ルピー分*をこれまで活用し、政府や他団体からの支援が届きづらい山間部へ物資を届けました。マカワンプール郡タハ町（カトマンズ市より車と徒歩で5時間半から6時間ほど南西）と、カトマンズにあるゴカルナ・デシェ村へ、水やテント、そして仮設住宅用のトタン屋根とシェルターを届けました。6月中旬から雨季に入り、集中豪雨による土砂崩れなどの被害が予想される中、トタン屋根やシェルターは日中の強い直射日光と雨風をしのぎ、多くの人たちの生活を守ります。「遠く離れたネパールの震災を、まるで自分のことのように感じ、支援を送ってくださった日本の皆様へ、心の底からお礼を申し上げたい」と感謝の言葉がネパールから寄せられました。近隣の学校や住民からの要望に応えるため、引き続き支援を行います。

* (1,873,776円相当、1円=0.82ネパールルピー、2015年6月11日時点)



2014年度 ムラのミライを支えてくださったみなさま

日本 対話型ファシリテーション中級フィールド研修
インド 地域づくり入門スタディ・ツアー
コミュニティ・ファシリテーター研修



会員・サポーター **190**人 **2,153,000**円

個人からのご寄付 (個人・企業・団体) **196**件 **2,776,631**円

クラウドファンディング READYFOR
「課外授業を行い
ネパールの汚れた川を子どもの手でキレイにしたい」



書籍「途上国の人々との話し方」の購入
441冊 **45**冊
英語版「Reaching Out to Field Reality」

対話型ファシリテーション基礎講座・入門セミナー



企業や団体からのご支援・協働

大和リース(株)、健栄住宅商事(株)、笠原木材(株)、
(株)池村商会、(特活)アユス仏教国際協力ネットワーク、
円光寺、飛騨産業(株)、飛騨信用組合、
龍谷大学ボランティア・NPO活動センター、
(株)ビデオエイベックス、(有)高山ビジネスマシン、
平安楽、ヤスタベンション (順不同、敬称略)

助成金・補助金

外務省(日本NGO連携無償資金協力・NGO事業補助金)
(公財)公益推進協会(夢屋基金)
(一財)まちづくり地球市民財団
(公財)岐阜県国際交流センター

事業委託

JICA(草の根技術協力事業 草の根パートナー型、
専門家派遣)
外務省(NGO相談員)

書き損じハガキで国際協力
ハガキ **6,128**枚、
切手および商品券等 **217,691**円、
合計 **435,858**円



4月



トークイベント「セネガルの人々との話し方」
代表の和田信明・中田豊一が、セネガルにおける新プロジェクト形成のための現地調査の結果を報告しました。2人のマスターファシリテーターが、どのようにセネガルの人々対話し、プロジェクトへと結びつけていったのか、そして、会場ぴくりの村の成り立ちやお土地柄ならではの農業などを紹介しました。■場所：大阪府大阪市■参加者数：21名



11月

団体名が変わりました!

特定非営利活動法人ソムニード
▼
特定非営利活動法人ムラのミライ

新しい団体ロゴ

認定NPO法人
ムラのミライ



6月



初夏のトークイベント

帰国中の海外駐在員などが、それぞれの活動や想いをプレゼンで発表し、理事・スタッフや一般参加者に評価をもらってイベントを開催しました。■プレゼンタイトル：「21年目のソムニード→〇〇〇」(新団体名の紹介)、「オラたちのつくるムラ」(インド活動紹介)、「バグマティ川へのラブレター」(ネパール活動紹介)■場所：岐阜県高山市、兵庫県西宮市■参加者数：20名、15名



第16回日本水大賞の「国際貢献賞」を受賞!

インドでの小規模流域管理事業が、水環境の保全等に取り組む活動を表彰する日本水大賞の「国際貢献賞」として表彰されました。惜しくも「大賞(グランプリ)」は逃したものの、「7年間という長い期間で水資源の涵養に取組み、また、どの活動にも必要な、住民が主体となるという点を実現していることが高く評価される」という講評をいただきました。

10月



川の国際交流プログラム

ネパールから学校の先生、公務員、NGOスタッフら7名が来日し、市民によるゴミ処理やリサイクル等の活動について学びました。(特活)地域の未来・志援センターの協力のもと、川などの環境保全活動を継続して行う名古屋・岐阜を中心とした5つの市民グループ・団体・企業の取り組みを視察しました。最終日には岐阜県大垣市にて報告会を行い、地域の方など24名に参加していただきました。

2月



ワン・ワールド・フェスティバル参加

関西地域で最大の国際協力の催し、第22回ワン・ワールド・フェスティバルにて、イベント開催ブース出展をしました。入場者数2万6千人の会場で、新しい方たちに活動を知っていただく機会になりました。■参加者数：「対話型ファシリテーションセミナー」21名、「マイクロファイナンス・シンポジウム」33名、ブースでのクイズ参加者49名



「途上国の人々との話し方」英語版を出版!

2010年に出版された書籍「途上国の人々との話し方 国際協力メタファシリテーションの手法」の英訳として「Reaching Out to Field Reality. Meta-Facilitation for Community Development Workers」を出版、全世界へと販売を開始しました。また、3月には出版記念トークイベント「途上国の人々との話し方の作り方」を開催しました。■場所：東京都渋谷区■参加者数：35名



詳細・ご注文はムラのミライ HP から
書籍注文 **ムラのミライ** 検索

2015年5月 役員メンバーが変わりました!

1993年の設立から団体を引っ張ってくれたメンバーを含む7名の役員が退任し、より若い世代の新役員が加わりました。男女比は5:6となりました。国内・海外でのコミュニティづくりに関わった経験、対話型ファシリテーションの実践経験、企業やNPO等の経営経験を持つ役員メンバーによる活動を、これからも応援よろしくお願いいたします。

■退任メンバー

- 代表理事 和田 信明 : (特活)ムラのミライ 海外事業統括
- 専務理事 竹内ゆみ子 : (特活)ムラのミライ 国内事業統括
- 理事 和仁 一博 : 有限会社まんな農場 取締役
- 理事 直井 晃一 : 菱太石油株式会社 常務取締役
- 理事 浅野 宜之 : 大阪大谷大学 人間社会学部 准教授
- 理事 長畑 誠 : 一般社団法人あいあいネット 代表理事
- 監事 高野 元樹 : (特活)ボラみみより情報局 代表

■再任メンバー

- 代表理事 中田 豊一 : 参加型開発研究所 所長
- 理事 山田 貴敏 : 笠原木材株式会社 代表取締役社長
- 理事 小森 忠良 : 十六総合研究所 主席研究員
- 常務理事 大塚由美子 : (特活)ムラのミライ 事務局長
- 監事 渡辺 成洋 : 税理士、渡辺成洋税理士事務所 所長

■新任メンバー

- 理事 早川美津子 : 民芸品工房もみの木 経営
- 理事 和田 美穂 : 社会福祉士
- 理事 久保田 絢 : 愛知淑徳大学 ビジネス学部 講師
- 理事 山岡 美翔 : たつの市 臨時職員
- 専務理事 宮下 和佳 : (特活)ムラのミライ 関西事務所職員
- 監事 河合 将生 : NPO 組織基盤強化コンサルタント office musubime 代表



2014年度ムラのミライ年次報告書

発行者/特定非営利活動法人ムラのミライ
発行責任者/代表理事: 中田豊一
発行日/2015年7月20日

高山事務所:
〒506-0031 岐阜県高山市
西之一色町3丁目820-1
飛騨高山・森のエコハウス気付
TEL: 0577-33-4097
FAX: 0577-36-5471
本部: 岐阜県高山市千鳥町900-1
飛騨・世界生活文化センター内
関西事務所: 〒662-0856 兵庫県
西宮市城ヶ瀬町2-22 早川総合ビル3F
TEL&FAX: 0798-31-7940